

# 町史

とっておきの話

204

長岡・河井継之助記念館友の会会員  
高梁方谷会会員

小名 泰裕

## 感動、そして出会い

二〇〇八年九月十三日、「近代の峠を越えて〜河井継之助が見た風景〜」というテーマで、シンポジウムが開催されました。場所は、季の郷・湯ら里です。記念講演は歴史作家の半藤一利氏が話され、その後、司会も含め五人の歴史研究者でパネルディスカッションが



河井継之助をテーマに只見町で開かれたシンポジウム(平成20年9月13日)

行われました。

講演で、半藤さんは「河井継之助はあれほど開明的であったが、幕末時に、一歩も二歩も出遅れた。残念です。時の運がなかった」と話されています。

パネルディスカッションは、司馬遼太郎記念館の増田恒男氏、京都霊山歴史館の木村武仁氏、会津若松からは間島勲氏、地元只見からは飯塚恒夫氏が登壇され、司会は長岡河井継之助記念館の稲川明雄氏でした。

増田さんは、司馬遼太郎のことや司馬遼太郎記念館友の会で行った「好きな司馬作品」のアンケートのことを話されました。アンケートでは、『峠』が五位になり新選組の土方歳三を描いた『燃えよ剣』より上位であったとのことでした。木村さんが言うには、霊山歴史館で河井継之助をテーマにした講演会で、長岡から団体が来られて驚いたと話されました。間島さんは、幕府奥医師だった松本良順が河井継之助を只見で診たという資料が残っていることを説明されました。地元の飯塚さんは「只見の目明し清吉の家屋で、河井継之助は村民の何かに感動したのではないだろうか。それで無理だと分かっ

いながら会津若松に向かったのだと思う。只見の人たちは、河井継之助に何か影響を与えたに違いない」と話してくださいました。

司会の稲川さんは「只見の人が見た河井継之助は立派な人であったから、只見の村人は終焉の間の継之助を見ていたに違いなく、感動したのではないか」と思われたそうです。

只見の飯塚さん、長岡の稲川さんという河井継之助研究家のふたりが、共に河井継之助と只見の村民の双方が感動したと言っておられます。

私はこの感動について考えたのですが、その手掛りになることが只見河井継之助記念館に掲示されている小沼前町長の『あいさつ文』に見つけました。

挨拶文を読むと「継之助の義の精神に只見の人たちが感動した」と書いてあり、それに対して河井継之助は「只見の人たちの、身分を超えた優しい心根」に感動したのではないかと書いてあります。

この挨拶文の「おもしろい」ところは、この記念館は決して河井継之助の悲運を憂いて出来たのではなく、継之助と只見の人びとの出会いを記念するために造られ

たとあります。すごく洒落た挨拶文だと思えます。

私も含め継之助ファンは、この記念館に来ると河井継之助の悲壮な最期を覚えてしまい、「感動」とか「出会い」とかの言葉はなかなか思いつきません。

河井継之助と只見の村人との「感動」がこの「出会い」を後世に残し、そして記念館を造らせたのだと思います。

河井継之助は、あれほど先見性がありながら悲運な死を迎え、運のない侍と生きていたのですが、継之助の死の百年後、小説『峠』が世に出、そして生誕の地、終焉の地に記念館をもち、その死さえも感動に変えてしまったことを考えてみるとこれほど運の良い武士もいないのではないかと感じてしまいます。

さて、今回でもって「町史とっておきの話」を終わりにしなければいけないことが残念です。六カ月間という長いような短い期間でしたが、只見と河井継之助についてこれほど考えた時間はありません。自分自身にも新しい発見もありました。このような場を与えてくださった只見町の皆様に感謝いたします。